

# 心からの願いを注ぎ出す

チャンジュンサン  
— ハンナと 張準相 —

サムエル記上 1 : 9—20

ルカ 4 : 16—22



司祭 ヨハネ 井田 泉

桃山学院創立記念日礼拝

2012年9月4日

奈良基督教会にて

桃山学院中学校の皆さん、こんにちは。

奈良基督教会によろこそいらっしやいました。

皆さんの学んでおられる桃山学院は 1884 年、今から 128 年前に大阪の川口に創立されたと聞きました。その次の年、1885 年に、大阪川口の教会から伝道師さん（中島虎次郎、田中宇喜治両氏）が来られて、この奈良でキリスト教伝道が始まりました。これが奈良基督教会の始まりです。1887 年に奈良基督教会は創立されました。地図で見ると大阪川口と奈良市は東西ほとんど真横。桃山学院はキリスト教の聖公会の学校。奈良基督教会は聖公会の教会。桃山学院と奈良基督教会はこのようにつながっています。

短い時間ですが、奈良基督教会、ことにこの礼拝堂を味わってほしいと願います。

わたしたちは今、礼拝堂で礼拝をしています。先ほど読んでいただいた旧約聖書、新約聖書両方とも、礼拝堂での出来事が語られていました。

旧約聖書・サムエル記の個所は、今から 3000 年も前、紀元前 1000 年頃のイスラエルでの話です。その場面に近づいてみましよう。

場所はシロという町。古代イスラエルの首都でした。エルサレムが建設される前のことです。シロには神殿があって、エリという年老いた祭司がそこに仕え、イスラエルの人々の指導者として尊敬を集めていました。

ある日のこと、祭司エリは神殿（つまり礼拝堂ですね）の柱に近い席に座っていました。祈るため、また黙想するためです。この礼拝堂の前のほうにも柱がありますね。

するとそこにひとりの若い女の人が入ってきました。そしてずっと黙ったまま座っています。

あまりに長時間その女の人がじっとしているので、エリは気になって、その人を見ました。すると唇をもぐもぐさせています。様子がおかしい。表情も普通ではないようです。エリは思いました。この人は酒を飲んで酔っているのだ。酔った状態で神殿に入って長々と過ごすとは何たることか。エリはその女の人を咎めて言いました。

「いつまで酔っているのか。酔いを覚ましてきなさい。」サムエル記上 1:14

すると女の人は答えて言いました。

「いいえ、祭司様、違います。わたしは深い悩みを持った女です。ぶどう酒も強い酒も飲んでおりません。ただ、主の御前に心からの願いを注ぎ出しておりました。はしためを墮落した女だと誤解なされないでください。今まで祈っていたのは、訴えたいこと、苦しいことが多くあるからです。」1:15-16

エリは悪かったと思い、その女の人の話を聞きました。その女の人はハンナという人で、とても苦しんでいました。食事もうを通らない状態だということです。夫はエルカナという人で、エルカナには二人の妻がいる。もうひとり妻はペニナといい、子どもを何人も産んだ。しかし自分には子どもがない。毎年、家族でこのシロの神殿に礼拝に来ている。今年も家族でやって来て礼拝をささげた。礼拝の後、家族で食事をした。その食事の席でペニナが、自分に対して

子どもがないことで意地悪を言う。それがもう何年も何年も続いていて、特に家族で神さまを礼拝した後の会食という大事な場所で、皆の前でそれを言うので、悲しみと屈辱で自分は耐えられない。

今で言えばいじめであり、虐待ですね。

それでハンナは、誰にもそれを訴えることができず、耐えられない悲しみと怒りと屈辱の思いを神さまだけにはわかっていただきたくて、辛い思いを注ぎ出して祈っていたのです。

**「ただ、主の御前に心からの願いを注ぎ出しておりました。」**

ハンナはこう祈っていました。

**「万軍の主よ、はしための苦しみを御覧ください。はしために御心を留め、忘れることなく、男の子をお授けくださいますなら、その子の一生を主におささげし、その子の頭には決してかみそりを当てません。」 1:11**

祭司エリはそれを聞いて心が苦しくなり、どうかしてこのハンナに神さまが喜びと平安を与えてくださるように心から祈りました。そしてハンナに言いました。

**「安心して帰りなさい。イスラエルの神が、あなたの乞い願うことをかなえてくださるように」 1:17**

続きを読んでみます。

「ハンナは、『はしだめが御厚意を得ますように』と言ってそこを離れた。それから食事をしたが、彼女の表情はもはや前のようではなかった。」1:18

ハンナは元気を取り戻しました。食事もしました。将来に希望を持って生きることができるようになりました。

シロの神殿、礼拝堂で何が起こったか。ハンナが苦しい胸の内を全部神さまに注ぎ出して祈ったこと。それが大事なひとつです。もう一つは祭司エリが、最初は誤解したけれども、よく受けとめて、一生懸命ハンナのために祈ってくれたことです。

それからしばらくして、ハンナは男の子を産みました。サムエルという名前を付けました。サムエルとは、「その名は神」という意味です。「祈りを聞いてくださったその方の名は『神』」という思いをわが子の名前に託したのです。サムエルはやがて成人し、イスラエルを守り導く預言者となります。

今、3000年のイスラエルのシロの礼拝堂での出来事を思い出した。

まったく違うけれども、重要なことがかつてこの奈良基督教会で起こりました。今から89年前。奈良基督教会の現在のこの礼拝堂ができる7年前のことです。

89年前の1923（大正12）年9月1日に何が起こったかご存じでしょうか。関東大震災です。10万人余りが死亡または行方不明になったと言われます。大震災の被害のものすごさに加えて、そのとき、もうひとつの大きな悲劇が起こりました。震災後の不安な空

気の中で、根も葉もない噂、流言蜚語が広まったのです。

どういふのかと言うと、朝鮮人が井戸に毒を撒いた。朝鮮人が村を襲っている……などといったでたらめな噂でした。ところがそれを信じ込んだ人たちが大勢いて、震災で逃げ惑い、あるいは避難生活をしている人たちを次々に検問し、取り調べ、朝鮮人とみると有無を言わさず殺してしまうという恐ろしい事態が発生しました。普段は善良な市民が、狂ったようになって朝鮮人を殴り、突き刺して殺すのです。犠牲になった人は 3000 人とも 6000 人とも言われます。

その渦中に <sup>チャンジュンサン</sup>張準相 という 22 歳の朝鮮人留学生がいました。この奈良基督教会の信徒で、立教の学生だったようです。張準相青年は命からがら東京を脱出、この奈良基督教会に助けを求めました。

当時、奈良基督教会の牧師は吉村大次郎司祭でした。張準相青年は今にも日本人が自分を殺しに来るのではないかと恐怖を抑えることができません。その話を聞いた吉村司祭は、日本刀を持って来て、張準相青年にこう言ったそうです。

「あなたをもし、殺そうとしてだれかがやって来たら、この日本刀でわしを殺してからにせよと言ってやる。絶対にあなたを見放しはしない」

そのようにして張準相青年はこの奈良基督教会で守られ、ここで自分を決して見捨てないイエス・キリストの愛に触れました。このキリストの愛を苦難のうちにある同胞に伝えたいと決心し、牧師になるために、その年の 12 月、ここから送り出されて福岡神学校に入学したのです。奈良基督教会の教籍簿には「大正 12 年 12 月 18 日、福岡神学校チャペルに転出ス」と記されています。

張準相青年は奈良の当時の礼拝堂で、心から願いを注ぎ出して祈ったに違いありません。

張準相師はやがて大阪に聖ガブリエル教会を創立されました。当時の状況から日本名を使うようになり、張本栄という名前で働かれました。これが現在、大阪の生野区にある聖ガブリエル教会の始まりです。

わたしはこの話を、張先生のご長女の張<sup>チャンソソ</sup>聖子<sup>ジャ</sup>さんから聞いたのでした。

この張準相（張本栄）先生の人生の新しい出発は、教会で、また礼拝堂で起こったのです。

礼拝と礼拝堂は出会いの場です。ハンナはシロの礼拝堂で祭司エリと出会い、それによって神さまと出会いました。この奈良の教会で張準相青年は吉村司祭と出会い、キリストと出会いました。

そして 1000 年前、ナザレの礼拝堂では、人々はイエスと出会い、神の声を聞きました。

皆さんの学校がキリスト教学校であることはとても大事です。礼拝と礼拝堂をとおして、人は人と出会い、神との出会いを与られます。耐えがたい苦しみの中でも祈ることができ、祈りがきっかけになって出会いが与えられ、神さまの励ましと導きを受けることができるようになります。

シロの礼拝堂で起こったこと、ナザレの礼拝堂で起こったこと、奈良基督教会で起こったこと。そこで起こった神さまの働きが、皆さんの学校生活で、またことに礼拝、祈り、聖書をとおして起こることを祈り願います。

ハンナを、また張先生を守り支え導かれた神さまが、皆さんを守り、支え、導いてくださいますように。アーメン